



27 《粉本》 赤穂義士画像

鉄齋美術館開館35周年記念

鉄齋 — 粉本^{ふんぼん}に見る学びの跡 —

2010年5月12日(水)～8月1日(日)

◎前期：5月12日(水)～6月20日(日)

◎後期：6月23日(水)～8月1日(日)

10時～16時 月曜日休館 但し7月19日(月)は開館 翌日休館
6月22日(火)は展示替のため休館

「粉本」とは古く中国唐代に語源を持ち、元の夏文彦^{かぶんげん}が画人を論評した『図繪宝鑑』に「古人の画稿、之を粉本と謂う」とあることより画稿を指す言葉であった。我が国においては絵師が後日の制作や研究、修学のために模写したものを指し、永く絵手本として尊重された。こうした模写には描線だけを写したものの、淡彩を施したものの、色名を記したものの、実寸通り忠実に写したものの、略写したり縮写したもの（縮図）など様々なものが見られ、江戸時代においては土佐派や狩野派など大和絵系漢画系を問わず粉本を蓄積することが盛んに行われた。狩野探幽や常信が鑑定に持ち込まれたすぐれた作品を、作画の参考と鑑定能力を育成するために縮写した「探幽縮図」や「常信縮図」は資料的価値が極めて高い。

さて、鉄斎は後年、自身の絵に特に師承はなく、すべて盗み絵だと語っているが、ほとんど独学でなされた画業の修得は、現在我々が「鉄斎の粉本」と呼ぶ膨大な数で遺されている模写類から知ることができる。それらの原画は和漢を問わず各時代に及び、分野では仏画、山水、人物、花鳥、風俗、絵図など多岐に亘り、様式では大和絵、狩野派、写生派、琳派、文人画などあらゆる流派を網羅し、原画の筆者も極めて多彩である。また鉄斎が写し取ったものは単に絵画だけではなく、墨蹟、彫刻、工芸品、道具類など類い希な好奇心の赴くままに写し取っていることが分かる。これらには模写に至る経緯や背景、自身の知見など様々な覚書が記されたものも多く、鉄斎の倦むことのない探求心と好奇心を見ることが出来る。自身の画道に対する考えを具体的に述べた「南画論」（鉄斎研究40-11）には「画道ハ規望高遠ニシテ、先ツ南派ノ人ハ、古名人ノ真蹟ヲ熟覽ノ余、其真蹟ヲ臨^{イタダク}摸^{カキ}ヲ能クスベシ。臨摸シテ古人ノ画格筆意ヲ研究シ而、其画ノ位置^{イロハ}ハ、自己ノ胸中ヨリ組織スベシ。決而他人ノ図ヲ用フベカラズ。一木一石研究シ、真物ヲ参照シ、造化ヲ手ニ入ルベシ」とある。臨には「ミテウツス」、摸には「スキウツス」と註が付けられている。こうした粉本と「南画論」からは、鉄斎の画業修得は古人のすぐれた画を熟覧し、画技、筆法、構図、彩色を写し、ひいては古人の画格筆意を研究することであり、そうした積み重ねが自身の画を創り上げていったのである。鉄斎は89歳で没するまで模写の手を休めることはなかったが、本展では最も若い19歳の《雉子図》(No.11)から87歳で写された《木食応其上人像》(No.67)までを展示し、ほとんど70年に及ぶ学びの跡を辿ることができる。

それでは出品の作品の中から、鉄斎が関心を持ち続けた赤穂義士に因む作品を取り上げる。鉄斎と赤穂義士については、すでに先学のすぐれた研究¹がなされているが、新に発見された資料も加えて紹介したい。

明治14年（1881）46歳の鉄斎は大阪堺の大鳥神社の大宮司を辞し、翌年終生過ごすことになる京都室町一条下るに居を移した。ここからほど近い堀川頭に赤穂義士ゆかりの大徳寺派紫雲山瑞光院があった（現在は京都市山科に移転）。《赤穂義士画像》(No.27)の覚書には瑞光院什宝の図を明治15年10月寺内修復の際、院主に乞うて写したことが識されている（原画は現在京都大石神社蔵）。原画の寺田孝忠筆《赤穂義士画像》は《長矩侯画像》^{ながたけこう}と三幅対として一箱に納められ、箱の表には「浅野家三幅対 瑞光院常住」と書かれている。右幅に大石良雄を中心に吉良邸の表門から討ち入った義士23人を、左幅には裏門から討ち入った義士23人を描いている。鉄斎はこの図を模した翌年、上賀茂神社社家である津田家のために原本に忠実に寺坂吉右衛門を除く46人による《赤穂義士像》(No.78 清荒神清澄寺蔵・鉄斎研究11-7)を描いた。この作品は後に大石良雄ゆかりの祇園一方の所有に帰していた。



(左隻)

八曲一双の右隻第一扇に「赤城遺臣 精忠大節。富岡百鍊題并摸古」と書し、右隻左隻の十四扇に一扇に3人ないしは4人の義士を描き、賛には室鳩巢の『赤穂義人録』を引いている。この粉本は原画、本画が揃う貴重な例で、本展では本画《赤穂義士像》を併せて展示して粉本からの展開をご覧いただけるようにした。

《大石大夫画像》(No7)の原画は有馬鴻雪筆のもので、「大石大夫画像賛 富岡鏡斎藏」と鉄斎によって書かれた紙が軸裏に貼られ、鉄斎が瑞光院に寄贈したとされている。この粉本をもとに《大石主従図》(個人蔵)や《遺像在此帖》(清荒神清澄寺蔵・鉄斎研究71-6)中の「大石主従図」が描かれた。

赤穂浪士の義挙の顕彰に努めていた鉄斎は、明治34年(1901)10月13日には瑞光院で大石良雄以下四十六人の二百年忌追薦を發起人の一人となって執り行い、記念に大石良雄の辞世の歌「おもひいる身は武蔵野の夕露に残る心は朝の下草」²を写し同感の士に頒かったようである。また当時無住となっていた瑞光院の院主をかねていた大徳寺黄梅院院主より境内に埋められていた義士たちの遺髪が見つかりそれを見せてもらったこと、大正2年(1913)には書院などの修築に大石良雄の山科閑居や伏見撞木町、祇園や瑞光院の景を襖十二面に描いた《忠臣板蕩図》(現在は六曲一双に改装・鉄斎研究61-16)を贈るなどの関係が続いていた。

また四十七人目の義士寺坂吉右衛門を描いた《寺坂吉右衛門像》(No41、42)はその覚書によると、明治44年(1911)京都松原の因幡薬師で赤穂義士の画と木像が展観された時に借覧して摸したもので、赤穂花岳寺が蔵している打ち入り後に大石良雄の密命を奉じて芸州に赴く際の姿であるという。

以上のような粉本や本画の他には《大石遊興図》(高島屋史料館蔵・鉄斎研究15-4-27)や《有喜大尽図》(清荒神清澄寺蔵・鉄斎研究36-11)などが知られている。

芝居にあるいは義士祭など今も尚多くの人々に親しまれている赤穂浪士の、鉄斎は大石良雄の人間性に引かれたことは勿論であるが、四十七士のうちただひとり肖像のなかった寺坂吉右衛門にも注意を向けるなど、鉄斎の嗜好が窺えて興味深い。こうした赤穂義士に因む粉本をはじめとする新資料の紹介は、鉄斎の義士顕彰活動の一端を明らかにすることと思われる。

鉄斎美術館は本年開館35周年を迎え、開館以来、鉄斎芸術を研究する上で欠くことのできない「鉄斎の粉本」を紹介する展覧会も29回を数えることになった。所蔵の粉本も350点を優に超える。今後も粉本は調査研究と装演の成ったものから順次紹介し、判明した原画は所蔵者の協力を得てカラー写真パネルを制作して粉本と比較できるようにし、粉本から本画の辿れるものは併せて展示して行く所存である。こうした展示から、鉄斎の遺した多種多様な粉本は鉄斎芸術成立の学びの跡であることを理解していただけるものと思う。(奥田素子)

1. 森芳功「富岡鉄斎〈書簡 今泉氏宛〉をめぐって 鉄斎の赤穂義士顕彰活動、鉄斎と今泉雄作の交流」(『徳島県立近代美術館研究紀要』第6号 2004)
2. 一般に知られている辞世の歌とは異なる。



《出品目録》

番号	名 称	原画筆者等	制 作 年	年令	本 紙 寸 法	材 質・彩色	形 状			
1	牛祭図	浮田一蕙			103.0× 35.2	紙本 着色	掛 幅			
2	牛祭覚描き帖				27.5× 37.7他	紙本 着色・墨画	画 帖			
3	牛若丸図	狩野探幽			80.7× 74.0	紙本 墨画	掛 幅			
※	4	大伴旅人愛酒図	田中訥言		40.0× 57.0	紙本 着色	掛 幅			
※	5	大伴家持古蹟見取図并拓本			196.4× 32.7	紙本 墨画	掛 幅			
※	6	小川可進像	武沢楊岸		64.7× 34.0	紙本 淡彩	掛 幅			
※	7	大石大夫画像 拓本合装	有馬鴻雪		77.3× 46.0	紙本 墨画	掛 幅			
※	8	加藤清正像・繫馬図	中川寿林・土佐光信		27.0× 37.0	紙本 淡彩	掛 幅			
☆	※	9	関雲長像	馬元欽	77.2× 53.5	紙本 淡彩	掛 幅			
☆	10	観世音菩薩像	徐枋		118.2× 65.0	紙本 淡彩	掛 幅			
	11	雉子図		安政元	1854	19	95.2× 30.7	紙本 着色	掛 幅	
	12	京極宗輔図	田中訥言		108.3× 25.9	紙本 着色	掛 幅			
	13	近古名士肖像卷			28.0× 675.0	紙本 淡彩	卷 子			
	14	狗子図	伝徽宗		27.4× 38.4	紙本 着色	台紙貼			
	15	孔雀図	窪田雪鷹		102.0× 38.0	紙本 着色	掛 幅			
※	16	黄梁一炊図	渡辺崋山		158.0× 72.5	紙本 淡彩	掛 幅			
※	17	五祖荷鋤図	牧溪		66.0× 31.0	紙本 墨画	掛 幅			
※	18	枯木鳥図	陳琳		27.0× 37.8	紙本 墨画	掛 幅			
※	19	小堀遠州像	松花堂昭乘		75.3× 29.5	紙本 淡彩	掛 幅			
※	20	後醍醐天皇像	京都 大徳寺本		133.5× 74.5	紙本 淡彩	掛 幅			
☆	21	子育観音図	陳賢		52.6× 43.0	紙本 淡彩	掛 幅			
☆	22	猿を襲う鷹図	宮本二天		109.0× 46.0	紙本 淡彩	掛 幅			
※	23	芝仙祝寿図	渡辺崋山		110.0× 33.6	紙本 淡彩	掛 幅			
☆	24	釈尊出山図			83.8× 39.4	紙本 淡彩	掛 幅			
※	25	職人尽歌合絵師図	《鶴岡放生会職人歌合》のうち		26.0× 38.0	紙本 淡彩	掛 幅			
※	26	秋景山水図	范寛一汪葑		190.5× 106.3	紙本 淡彩	掛 幅			
☆	※	27	赤穂義士画像	寺田孝忠	明治15	1882	47	各 70.3× 65.8	紙本 淡彩	双 幅
	28	将軍塚絵巻	京都 高山寺		31.0× 394.4	紙本 墨画	卷 子			
	29	菅原道真像			26.9× 38.0 46.5× 34.7	紙本 淡彩	掛 幅			
	30	先哲画像巻			26.4× 560.0	紙本 淡彩	卷 子			
※	31	千利休像	長谷川等伯		98.3× 48.5	紙本 淡彩	掛 幅			
※	32	蕎麦図・桔梗図			28.0× 39.0	紙本 淡彩	台紙貼			
※	33	平重盛像	伝藤原隆信		136.0× 112.0	紙本 淡彩	掛 幅			
※	34	醍醐天皇像	京都 醍醐寺本		112.8× 53.0	紙本 淡彩	掛 幅			
※	35	大黒屋光太夫像			26.8× 38.2	紙本 墨画	台紙貼			
※	36	達磨像	顔輝	大正9	1920	85	81.3× 66.7	紙本 着色	掛 幅	
※	37	探幽画法	狩野探幽		21.0× 293.6	紙本 墨画	卷 子			
※	38	竹虫図	趙昌		112.5× 54.8	紙本 淡彩	掛 幅			
※	39	角大師考			28.0× 286.5	紙本 墨書	卷 子			
※	40	手島堵庵像	京都 明倫舎本		65.2× 50.0	紙本 着色	掛 幅			
	41	寺坂吉右衛門像		明治44	1911	76	30.0× 41.0	紙本 着色	手控帖	
	42	寺坂吉右衛門像		明治44	1911	76	26.2× 36.0	紙本 着色	手控帖	
	43	天寿国曼荼羅銘文繡字	奈良 中宮寺		28.0× 39.0	紙本 着色	台紙貼			
※	44	天池石壁図	黄大癡		132.0× 53.3	紙本 淡彩	掛 幅			
※	45	天台石梁図			179.2× 61.5	紙本 淡彩	掛 幅			
※	46	陶淵明像	増山雪斎		79.1× 38.7	紙本 淡彩	掛 幅			
※	47	陶淵明像	中山高陽		40.0× 53.2	紙本 淡彩	掛 幅			
※	48	東寺什宝辛櫃画散楽図			28.0× 39.0	紙本 着色	台紙貼			
※	49	徳川斉昭像	小林玉潤		66.5× 60.5	紙本 淡彩	掛 幅			
※	50	豊臣秀吉像	アメリカ サンフランシスコ・アジア美術館本	明治40	1907	72	49.9× 37.2	紙本 淡彩	掛 幅	

	51	長刀鉾図		明治31	1898	63	38.0×26.7	紙本 着色	台紙貼
	52	那智三瀑図	野呂介石	明治24	1891	56	123.8×38.4	紙本 墨画	掛 幅
	53	能因法師像	土佐光起				56.1×59.1	紙本 墨画	掛 幅
※	54	叭々鳥図	沈南蘋				78.2×55.0	紙本 着色	掛 幅
	55	番匠図	三熊思孝『東北院職人歌合』所載				26.9×38.2	紙本 墨画	掛 幅
※	56	婆珊婆演底主夜神図	京都 檀王法林寺本				93.6×37.1	紙本 墨画	掛 幅
	57	琵琶湖図	池大雅				131.2×42.9	紙本 着色	掛 幅
※	58	武陵桃源図	董其昌				164.0×64.0	紙本 着色	掛 幅
	59	藤原惺窩市原村幽居図	狩野山雪				106.6×28.5	紙本 淡彩	掛 幅
※	60	糸瓜群虫図	伊藤若冲				121.0×51.5	紙本 淡彩	掛 幅
	61	奉先堂図					93.9×54.8	紙本 淡彩	掛 幅
	62	牡丹花肖柏像					43.9×33.3	紙本 墨画	掛 幅
	63	墨竹図					149.0×51.0	紙本 墨画	掛 幅
※	64	本因坊日海像	京都 寂光寺本	明治22	1889	54	47.7×20.4	紙本 淡彩	掛 幅
※	65	名花十友図	椿椿山				131.5×73.1	紙本 着色	掛 幅
※	66	鳴鶴図	文正				各148.3×90.4	紙本 着色	双 幅
※	67	木食応其上人像	高野山 金剛峯寺本	大正11	1922	87	79.0×48.5	紙本 淡彩	掛 幅
※	68	山崎烈士最後酒宴図	立花梧庵				53.0×39.0	紙本 墨画	掛 幅
	69	大和御陵位置図巻		明治9	1876	41	33.3×386.0	紙本 墨画	巻 子
☆	70	養老瀑図	高久隆古				131.5×42.5	紙本 淡彩	掛 幅
※	71	与謝蕪村像 貼蕪村句短冊	呉春				62.8×20.4	紙本 淡彩	掛 幅
	72	頼杏坪像					50.8×35.4	紙本 着色	掛 幅
※	73	頼山陽像	義亮				37.7×31.6	紙本 淡彩	掛 幅
	74	龍図	伊藤若冲				118.6×27.9	紙本 墨画	掛 幅
※	75	六祖像	土佐光起一田中訥言	明治24	1891	56	72.2×27.4	紙本 淡彩	掛 幅
☆	76	若布刈神事図					55.7×47.6	紙本 墨画	掛 幅
※	77	渡辺華山像	椿椿山				38.8×26.8	紙本 淡彩	掛 幅

※は原画をカラー写真にして展示、☆は本画を併せて展示。

[本画]

番号	名 称	制 作 年	年 齢	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	形 状
78	赤穂義士像	明治16	1883	48	各139.4×31.8	紙本 淡彩 八曲屏風
79	養老瀑図			50代	106.0×37.0	絹本 着色 掛 幅
80	観世音菩薩育子図	明治33	1900	65	127.3×51.0	絹本 着色 掛 幅
81	観世音菩薩像	明治39	1906	71	137.8×70.5	紙本 淡彩 掛 幅
82	釈尊出山図			70代	180.0×47.8	紙本 着色 掛 幅
83	文字市若布刈神事図	大正5	1916	81	100.0×45.1	紙本 淡彩 掛 幅
84	伏魔大帝関雲長像	大正10	1921	86	132.8×51.5	紙本 着色 掛 幅

[参考資料]

番号	名 称	筆 者	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	形 状
85	狩野山雪筆 藤原惺窩市原村幽居図	島南谷	136.3×31.5	紙本 淡彩	掛 幅

[原画カラー写真] 番号は粉本リストを参照

番号	名 称	筆 者	所 蔵 者
4	大伴旅人愛酒図	田中訥言	兵庫 逸翁美術館
6	小川可進像	武沢楊岸	京都 小川後楽堂
9	関雲長像	馬元欽	東京 渋谷区立松濤美術館(橋本コレクション)
16	黄梁一炊図	渡辺華山	個人
17	五祖図(狩野派模本唐画巻 巻第二十のうち)		東京国立博物館
19	小堀遠州像	松花堂昭乗	京都 孤蓬庵

20	後醍醐天皇像		京都 大徳寺
23	芝仙祝寿図	渡辺崋山	愛知 田原市博物館
26	秋景山水図	汪葑	京都市立芸術大学
27	四十七義士画像	寺田孝忠	京都 大石神社
31	千利休像	長谷川等伯	京都 不審菴
33	平重盛像	伝藤原隆信	京都 神護寺
34	醍醐天皇像		京都 醍醐寺
36	達磨像	顔輝	京都 広誠院
38	竹虫図	伝趙昌	東京国立博物館
40	手島堵庵像		京都 明倫舎
44	天池石壁図	黄大癡	大阪 藤田美術館
46	陶淵明像	増山雪斎	個人
47	陶淵明像	中山高陽	個人
48	東寺什宝辛櫃画散楽図		静岡 MOA美術館
50	豊国明神像		アメリカ サンフランシスコ・アジア美術館
54	草花群禽図	沈南蘋	個人
56	婆珊婆演底主夜神図		京都 檀王法林寺本
58	武陵桃源図	董其昌	京都 六波羅蜜寺
60	糸瓜群虫図	伊藤若冲	京都 細見美術館
64	本因坊日海像		京都 寂光寺
65	名花十友図	椿椿山	個人
66	鳴鶴図	文正	京都 相国寺
67	木食応其上人像		和歌山 金剛峯寺
68	山崎烈士最後酒宴図	立花梧庵	京都大学総合博物館
70	養老瀑図	高久隆古	兵庫 瀬川美術館
71	燕村画像	呉春	個人
73	頼山陽像	義亮	京都 頼山陽旧跡保存会
75	六祖大師三幅対	田中訥言	京都 三秀院
77	渡辺崋山像	椿椿山	愛知 田原市博物館

- ・ 出品作品は期間中2回にわけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。
前期 5月12日(水)～6月20日(日) 後期 6月23日(水)～8月1日(日)
- ・ 下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。
5月22日、6月12日、7月3日・24日 各土曜日の午後1時30分より
- ・ 今回の展覧会に際して下記の方にご協力を賜りました。記して感謝いたします。個人のご芳名は控えさせていただきます。(敬称略)
京都 大石神社
個人蔵 No.12.
- ・ 次回展覧会 「鉄斎 ―用印のすべて―」 平成22年9月7日(火)～12月12日(日)
8月2日(月)～9月6日(月)は夏期休館します。

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>